写楽浮上せず

stepano

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

写楽浮上せず

【Ｎコード】

Ｎ３２６４Ｚ

【作者名】

ｓｔｅｐａｎｏ

【あらすじ】

寛政四年暮れ、春朗は勝川派一門から除名された。生来転居癖のある春朗は居を八丁堀地蔵橋の長屋に移し唐辛子売りなどして役者絵界への復帰の機会を狙う。

謎の絵師、東洲斎写楽の正体に迫る…

第一回

転居には慣れている。ひどいときは三日で新しいところへ引っ越したこともあるくらいだ。根が苛ちかも知れない。気にいらないとすぐに飛び出していく。こう何回も転居癖が身についてくると引越しの要領も心得たものだ。絵具一式と寝具さえ詰め込めばこうして埃っぽくて騒がしい天神明町から朝露の弾く音まで聞こえてきそうな八丁堀の裏通りの長屋に落ち着く段取りだ。

春朗は部屋に戻って顔を拭きながら新居の爽快な朝の匂いを感じ取った。何が童子の智なくあどけなさを示しているか。この度の狩野派総帥の激しい怒りが今も鮮明に浮かぶ。それとその前の勝川派破門の原因となった経緯が同じように繋がってくるのだった。しかし、今は我が道を行くしかなかった。

早速唐辛子売りの支度に取り掛かり今日は両国橋あたりから油町へ抜けることに決める。銭がなけりゃ好きな浄瑠璃も見られないしそれに絵の励みも出来ない。自分に言い聞かせつつ戸口を出た。最初の女房とも別れ今は独り暮らし。当分このままで余計な食い扶持の心配は一人分しなくてすむ。

朝靄のかかった長屋の路地に立つ商いの格好をした姿は十日前に除名され食い扶持を失った嘗ての勝川派一門を代表する役者絵師の姿とは誰も思えない風情である。

天秤棒を担ぎながら思う。自分には絵を描くことしか能がない。勝川派破門も狩野派追放も何の障りもない。絵を如何にして自分特有のものとして完成させていくか、それが常に求めるものであったからだ。絵は五つのときから彫っていたので体じゅうに絵に対する興味は染みついている。

歯を食い縛りながら両国近くの千石坂を上りやがてそこから下って

いって油町筋の問屋街へと進んで行った。
カタカタと戸を開ける音が響くなかを春朗の張りきった売り声が流れる。とおがらしー。とおがらしー。その声は朝陽のなかを弾むように反射する。
「ちょいとこれ高いよ」「いいかげんの辛さなのかい」「産地はどこなのさ」。乱れ飛ぶ女将さんの問いや使いの僕やらの喧騒にまみれながらぺこぺこしていると春朗にとっては初めて経験する世界なのでついこの間までの鬱積は姿を消してしまいそうであった。
こうやって唐辛子売りをするのも決して画道を捨てたわけではない。つい先だっての日光神廊の絵事再修理の随行、総帥狩野融川が描いた絵はまさに疎きに帰していた。童子の智なきあどけない様を示すといえ絵は第一に写実を基にするものだ。いくら裏に心を含んでいても評価に値しない。
その絵はひとりの童が竿を持って柿を落とす図を描いていた。しかし、竿の端は既に遥かに柿の所を過ぎていた。にもかかわらず童子は尚も足をつま立つ。果たして何の意味があるのかと指摘したことが融川に伝わり融川は怒って私を追放したのである。
今でも絵には先ず写実に忠実であることが画道の前提だと思っているし何も狩野派を非難するつもりはない。流派には秩序が一番重要なことなのだと教えられただけのことだろう。その前の勝川派破門の件だって結局は兄弟子春好との仲違いが原因のように思われてしょうがない。
いずれにせよ再起を図る機会を待つだけだ。当分は雅号のない絵師として唐辛子売りをつづけていくしかない。

第二回

長屋に戻り売上銭を勘定していると隣の物音が妙にうら寂しく響いてくる。それを聞くとはなしに耳にしながら銭を何度数えても当てにする芝居の木戸銭にあと二文足らない。足らぬ足らぬと唱えながらしばらく佇み新居の匂いを改めて嗅いでいた。しみじみここは静かなところだと気付く。この長屋にはいったいどんな住人が居るのか、朝早く出て夜遅く帰還するのでは隣の者の正体すらわからない。

今聞こえてくるのは隣人の微かな息づかいである。それは何かを唄っているのか。その声は謡にも聞こえてときには滑らかな調べである。細い響きは裏悲しく、高き音は笛の如く流れてくる。それは女の声であり年季の入った落ち着いた音色を感じさせた。まるで浄瑠璃の囃子を奏でるかのように聞こえてますますその怪しげな正体に足腰の疲れを忘れて聞き入ってしまった。

兄弟子春好のことは寝床に入っても甦り、何の運命のいたずらかつくづく勝川派破門は彼の策略にはまったとしか思えない。春好にとっては師匠春章に可愛がられる私が目のうえのたんこぶだったのだろう。師匠の突然の逝去が春好にとっては願ったり叶ったりの到来の時機だった。兄弟子春好には自分の招牌絵のことで嘲笑されみんなの眼の前で破り捨てられたこともあった。

しかし今でも役者絵に対する執着は捨て難く数年にわたってその若手旗手の筆頭として脚光を浴びた日々が走馬灯のように流れる。

なかなか眠れなかった。

「よっ、成田屋っ」

威勢のいい掛け声が頭に甦ってくる。歌舞伎舞台は中村座、絵筆を執る自分の姿がそれに重なってくる。版元は先を競って人気役者の絵姿を描かせた。鳥居清長、歌川豊国、喜多川歌麿、勝川春章らは

その主流であり、勝川派門下にあった自分も数々の役者似絵を描く機会に恵まれた。それらはすべて実際に歌舞伎小屋に臨場して写実するのでなく定型化した筆致のもと仕上げるのである。したがって各派にそれぞれの特徴があり歌舞伎役者は勿論のこと版元にも誰に描かすかが商運の鍵を握るのであった。しかし、再度役者絵の世界に返り咲こうにも今は破門の身、その機会は当分訪れてはこない。

春朗は長い間闇のなかで眼を凝らしていたがやがて静けさの張り詰めている現実に戻った。足らぬ足らぬかあと二文と再び浄瑠璃見たさに唱えながら布団をかぶるといつの間にか寝鼾を立て始めた。このとき春朗三十二歳。江戸は倹約令厳しき折だった。綱紀粛正の兆しもますます深度化しその結果、黄表紙作家等への処罰が盛んに行なわれていた。なかでも人気作家山東京伝が手鎖五十日、版元の蔦屋重三郎が財産半減の刑に処されたのは去年のことだった。更に歌舞伎の世界も本櫓のうち倹約令の煽りを受けて森田座、市村座は既に休業し中村座だけが残っていた。

そして春朗の師匠であった役者絵界の大御所勝川春章の死去とともにその寛政四年が暮れようとしていた。

第三回

三日三晩隣人の謡はつづいた。愈々心動かされてその正体を見極めようと決心する。浄瑠璃の声色にも似たその女の怪しさに複雑に心動かされて以って生まれた好奇心を押さえきれず遂に行動を起す。

「御免よ」

売れ残った唐辛子の籠を入口の傍らに置きその戸口の前に立つ。夜風が冷たく足元は凍っていたが上気する胸はときめいていた。やがて隅の方から女の一呼吸置いた返事が聞こえてきた。

「どなた？」

声はするが姿は現われない。怪訝な空気を察知してか暫く音すら消えた。

「隣に引っ越した者です。夜分に失礼します」

とつづければ、ややあってようやく現われ出でくる気配がしてきた。

「何かご用でも？」

女の風采を初めて見た。歳に違わず気品に満ちていてこれは深川の芸者かはたまた何れかの賭場の大姉御風情である。春朗より一回りは上の年恰好だった。まごつく隙を見せてはならずと先ず丁重に挨拶をする。

「姐さんの謡を拝聴し誰にとぞ風流の主がいらっしゃることかと。一度話でもお聞きしようかと伺ったわけでして」

「立ち話もぶざま、よかったらお入りなさい」

女に案内され部屋に入った。なかは炬燵が敷かれまわりの雰囲気にもまだ正月気分が漂っていて掛けてある衣装の匂いにもそれは感じられる。全体が小奇麗に整頓され男の自分の部屋とは雲泥の差だ。

「謡を励んでおられる様子は玄人とお見受けしますが何処かで伝授しておられるのか」

「なんの。なんの」

女は照れるようにして笑った。
「騒がしく伝っていたでしょう。とんだ迷惑をかけましてすいません。ただの稽古でございます。それに謡などではなくあれは小唄でございます」
三味の音も確かに混じっていたが小唄とは思わなかった。
「これはとんだ失礼をしました。ただ大したお声だと感心したので。して家元はどちらにて」
「ははは。家元だなんてとんでもございません。ただの座敷稽古でございます」
女は落ち着いていた。小唄にしては年季が入っているし座敷稽古とはいえよほどの芸人といえる。その手の経歴の持ち主であろうと春朗は思った。
「芸者でいらっしゃるのですか」
「神楽坂のお座敷に呼ばれています」
女は立ちあがって茶を汲みにいく様子。やり取り短く交わすうちに不思議と和んでいく。なるほど見渡せば箪笥の陰に三味線が置かれていた。掛けてあった着物にも芸鼓の馨りが漂う。
「不景気になったねえ、ひどい世の中だよ。松平様のご着任で町人方の豪勢な振舞いもさっぱり無くなっちまってさあ。このところお座敷もあがったりだよ。なんていう時代なんだろうねえ」
確かに今敷かれている倹約令は次第に巷の奢侈を奪いつつあった。
「森田座、市村座が休業したのも役者の給金を下げたからやってくことが出来なくなったっていうじゃないか。役者にも格付けがあろうってもの、ばかばかしくてやってられないよ。お上公認の芝居小屋なんて所詮つぶれるのが当たり前だよ」
「まこと、おっしゃる通り」
「芝居が好きでねえ…、三代目瀬川菊之丞なんて麗しの極めだよ。眺めていると世の憂さも忘れるわ」
春朗は女の口から放たれた言葉に不意を衝かれた。瀬川菊之丞といえば自分の嘗て描きし役者のひとりである。勝川春朗の役者絵と

して三代目瀬川菊之丞の大磯の虎こそちょうど一年前出版していたものだった。

第四回

「瀬川菊之丞ねえ。いい女形だ」
話を合わせながら茶を啜る。
「絵は見ましたか？大磯の虎」
「そうなんだよ、去年の正月興行の菊之丞扮する大磯の虎を描いたのが出たんだってねえ。わたし、客から聞いたんだけど手に入らなくて結局は見ずじまいだよ。残念だったわ」
まさか自分の眼の前にいる男が瀬川菊之丞の大磯の虎を描いた絵師とは思っていないだろう。春朗は黙って聞いていた。
「こんなお触れがつづくようだと…当分この楽しみもまたいつのことやら。芝居はもう中村座だけだわねえ。なんだかこれも危ないわねえ」
再び倹約令の話に戻りながら女は溜息をつくようにして茶を啜った。相当芝居が好きなようであった。
「中村座も危ないっていう話があるのですか？」
春朗にとっては初耳だった。
「そうなんだよ。あんた知らないだろうけどさこの長屋には芝居関係の人間が多いんだよ。特にさあ、ふたつ並んだ向かい側のね、一番西の角の家、何でも中村座の仕事に携わってるらしくてその人がいうには座も今年いっぱいだということらしいのよ」
「へぇー、その人中村座で何をやってる人ですか？」
「さあ、よく分からないんだけど、なんでも元は阿波の能役者の流れを汲む人だとか」
「阿波の能役者？」
「そう。ちょうどあんたと同じくらいの歳恰好だよ」
面白い処へ引っ越してきたものだと思った。この長屋は芝居に携わる者が多いとは。

「芝居が分かるのかい？」
「ええ、まあ」
女は春朗に視線を注ぎ穏やかな口調で尋ねた。歌舞伎役者の絵師が芝居を知らぬわけはない。先ほどから隠してはいるが勝川春朗といえば役者絵の世界ではその名を知られていたはずで、その人物が今はこうして唐辛子売りをしていることなど誰も知らない。
女は初めて会う春朗にそれ以上深くは聞かずただ最近の動静を軽く嘆いているかのようにしゃべっていた。女の首筋に年増とはいえ座敷芸者の色香がほんのりと漂っていたがどこかに陰鬱な影が写っているようにもみえた。陰りではない別物でそれは苦労の芯みたいな刻印といえそうだった。事情のある過去が小唄に現われていたといっても過言ではなかった。毎晩聞こえていた声のうら悲しさはこのせいだったかもしれなかった。
「ところでまだお若いようだけど何をしておいでだい？」
暫く間をおいてから女は話題を変えるように尋ねた。
「昔はちょっと絵を習っていたのですが何しろこんな時勢、食ってもいけず今は細々唐辛子を売るなどして暮らしてます」
「そうかい。大変だねえ」
「わたしも芝居が好きで、いずれ儲けた金で中村座へ見に行くのを楽しみにしております」
「そうかい、そうかい。まあ、頑張っておやり。あ、そうだその中村座へ出入りしているという能役者ねえ、何だったら聞いてみたら？いい話が聞けるかもしれないよ」
「その方のお名前は？」
「何といったかねえ：えーっと。そうだ斎藤、斎藤十郎兵衛とかいってたかねえ」
「斎藤十郎兵衛」
春朗はその能役者の名をひそかに心に刻んだ。
戸口まで見送られて外に出ると夜は既に凍りつき微かに白いものが降り注いでいる。

「おやまあ、雪だこと」
「ほんに、こりゃあ初雪」
ふたりは暫く戸口に佇んで雪を眺めた。
春朗が置いた唐辛子の籠の上に白い雪が積もっていた。

第五回

隣人の女の名は小紫といった。神楽坂の芸者で八高という料亭のお抱えであった。八高いう座敷は文人の会合で知らぬものはなかった。たまにお上の目付け役が姿を見せるほか富豪の町人衆が利用していたが大抵は著名な文人たちの集う場所だった。

黄表紙、滑稽本の著作者で名を売っていた朋誠堂喜三二、恋川春町、山東京伝らは昔この料亭の馴染みの客であった。従って小紫は巷の大方の出版事情をよく彼らからいち早く知ることができた。

しかしこれらの文人はみな刑を受けたのである。例の倹約令に抵触したからである。二年前、失脚した田沼意次のあとを継いだ松平定信が老中に就くと倹約令の内容は出版界の統制にもますます厳しさを増した。内容に過激なものや風紀を乱すような著作は作者のみならず出版した版元にも同罪が科せられ処罰された。他にこれらの統制は男女混浴の禁止等、町人の生活にも及びまた歌舞伎界にもその締めつけは広がっていく。お膝元の本櫓の座元とその歌舞伎役者の給与にまで統制が及ぶのである。それは営業時間等の運営の細事に渡って縮小を促し、大物役者に至っては給金を減額する通達だったのだ。これによってついに森田座、市村座はやがて休業せざるを得なくなった。同時に千両役者といわれたものも実在しなくなっていた。

このところ小紫の耳にはたった一箇所だけ残った中村座の行く末を案じる話を聞かない日はなかった。

春朗と会ってからひと月余りが経った頃、小紫は座敷に呼ばれて八高へ赴いた。

その日も朝から凍りつくような寒さで今にも雪が散らつきそうな模様だった。客は珍しく描き屋の集いらしく最初から議論が伯仲していた。集いとはいっても四人だけの小宴で話す言葉尻に上方の風土

が漂いこれまで見たことのない一見の客とみえた。小紫は不思議を覚えつつ脇に入って宴を取り次ぐも彼らの議論互いに譲らず、侘びなど寂びなど雅びなどと盛んに論じ合う。

傍らに散らしたる半紙のそれに描きし絵を論じたるものか時折手に取り皆口々に論じていた。

「皆様は上方の方でいらっしゃるのですか？」

小紫の問いにひとりが答えた。

「元はといえば上方の出だが、それが何か」

「いえいえ別にちょっと聞いたまでです。この店には珍しいお集まりなので、それに時折見えるお方のなかに同じ上方訛りに近いひとがいますものでそちらのご紹介かと」

「どなたのことかな」

「文人のお方ですが、日本橋通りの耕書堂にいらっしゃる十返舎一九とかおっしゃいましたかしら」

「知らんな」

四人の代表としてその彼が答えたが、なかに覚えていた者がいて「その者、書き屋であろう。確かに聞いたことのある名前だ」と言った。さらに、「耕書堂といえば蔦屋重三郎がやっている書肆だろう。彼はこの度の件で如何に相成ったか。身上半減といえば大なる打撃であろう」と言った。

小紫は一瞬びっくりした。よもや一昨年の出来事を見ずや知らずの一見の客から聞かれようとは思ってもみなかったからである。それに蔦屋重三郎とは個人的にも彼女にとってその昔関わりがあった。

「折角築きし十年の年月、元の財産を取り戻せるかどうか、今は苦難の日々だそうですよ」

何食わぬ顔をして答えたが彼女の心のなかは少し複雑に揺れていた。

第六回

小紫にとって蔦屋重三郎との関わりは単にこの八高が取り持つ縁だけではなかった。

小紫は嘗て吉原遊郭の遊女だった。そのとき新吉原大門口で書物を売っていたのが重三郎だった。吉原一帯の遊女屋の一覧、その抱え遊女名、更に揚代一覧等を刷りそのうえ山東京伝の絵を組み合わせて売っていた。当然顔を合わすこともあり話すこともあった。当時京伝は北尾重政の名を用いて絵筆を執っていたことも知っている。のちに重三郎が日本橋に耕書堂を構え京伝を食客として迎え入れ大いに繁盛していたことも承知の事実なのである。

故に小紫にとってこの度の京伝が手鎖、重三郎が財産半減の刑に処せられたことは決して他人事ではなかった。

そういった二人の間柄を知らない四人はやがて議論の続きに入り再び手にした絵の吟味をし始めた。小紫の耳に相変わらず彼らの話す言葉のなかに侘び、寂び、雅びなどの言葉が常に含まれそれが奇妙な用語として染みついた。

「どうでしょうかこのあたりでひとまず絵のお話を休憩なすっては」

退屈でたまりかねた小紫は思いついたように立ち上がり「お陰で部屋じゅう熱がこもり少し暑くなりましたよ」と言いながら部屋の戸を開け廊下に出て小窓を少しあけた。

「ほらご覧なさい、小雪が舞っています」

窓の外を眺める小紫の声にようやく四人は議論をやめて振り返った。四人の目はやがて「雪か」と少し興奮して唸ったかと思うと吸い付けられるようにして小窓に歩み寄った。

「さあさあ頭冷やしてお呑みなんせ。雪見酒、雪見酒」

小紫は部屋に戻り三味線を弾き始めた。ところが舞い散る雪を眺めた四人は銘々に新しい半紙を取り出し絵筆を握り締めて窓辺に居

座ってしまった。
「おやまあ、これは何の塾にてあるのかしら。雪景色がそんなに珍しいのですか？」
小紫は呆れてしまった。唄の調子も進まず白けるばかりである。
「雪の降る景色が珍しいのではない。画材として見入るのだ」
黙々と描きつづけるなかで一人が言った。それぞれの半紙にはただ墨一色の濃淡が小気味よく走り、辺りは静寂が覆った。彼女の目にはその絵の巧拙など分からない。
「こんなお客さまは初めて。お客さまたちは何と称されるお集まりなのですか？」
小紫は神妙に尋ねた。
「元を正せば俵屋宗達の流れを学ぶ大和絵派の門人だ。強いて言えば尾形光琳の画風を学んでいる仲間だ」
重三郎のことを聞いた者が答えた。彼は目を窓の外に向けたまま絶えず絵筆を動かしていた。
描き終えた四人が「さあ、呑もう」と本腰を入れてようやく酒宴に入ったのは既に戌の刻を過ぎていた。
今夜の小紫はかなり呑んだ。いつものように三味を弾き小唄を唄って彼らへの供応に尽くしたつもりだったが今夜はどこか違っていた。すっかり酔い潰れてしまいついには客が引き上げたときすら気付かなかった。
しばらく寝込んでしまったあとふと目覚めると傍らに彼らの描き残していった絵の半紙が数枚丸められて残っていた。彼女は寝ぼけ眼で立ち上がると何気なくその一つ三つを懐に入れやがて八高をあとにした。

第七回

その男はトン、トン、トンと片足で走り、振り返りざまにさっと飛び上がって向きを変え舞うようにして着地した。この動作を繰り返し行い一向に飽きる気配はなかった。顔は見えずその姿は常に後ろ向きなので肩の輪郭だけが春朗の目には軽快に映っていた。小紫が言っていた西の角の家居の前でしきりにその影は飛び廻っているのである。春朗はこの話を聞いたときから斎藤十郎兵衛への興味を持っていたのだがそれが実現したのである。

何という軽業であろうか。さすがはこれが能役者の舞いというものなのか。先ほどから感嘆して眺めているのだ。僅かに疾風が轟きその薄い路地に射す光が彼の気合の入れた呼吸に反射するかのように届いてくる。麻の半纏姿という粗末な稽古着に身を包み肌刺す寒さをものともせずただ一途に練習を続けている。人が近づいてもその動きは臆することなくただ同じ動作を繰り返す。トン、トン、トンと三間進んで姿勢をただしその場にて振り向いたと見せるや否や柔らかく肩を窄めて跳躍し高く浮かんで舞を決めていた。まさしくその男こそ十郎兵衛と思しき人物。春朗は間違いないと確信した。

能には舞いがある。自分がこれほどまでに吸い寄せられる意味が直感として分かっていた。自分の感じたものに間違いがないとすればそれは江戸の歌舞伎には見られない何かをそれは擁していた。眺める春朗の目にはそれが見えそうな気がした。

暫くあって、男は舞をやめ春朗に気付いたのかその場で動かなくなった。春朗の影を一瞥しやがて鋭い眼光を春朗に向けてきた。

「邪魔をして申し訳ない。わたしは向かいの長屋に住む唐辛子売りでございます。先ほどからあなたの余りにも見事な舞に見惚れていました」

春朗が慌てて答えると男は「新顔さんだね」と短く言った。

「去年の暮れに引っ越してきました」
春朗は初めて正面から顔を見た。身は小柄だが精悍な顔立ちでなるほど年恰好は自分と同じくらいに見えた。
小紫の部屋を訪れたときからちょうどひと月が経ち世は不安な幕開けとなった寛政五年の初春、中村座の正月興行もまもなく千秋楽を迎えようとしていたときの出会いだった。

第八回

小紫の言う通りこの長屋には多数の芸人がいた。彼らのほとんどは本櫓の芝居や人気役者を真似、巷の路上で演じる集団だった。集団は昼夜となく一つにまとまって稼ぎに出ていた。

「とんだ猿芝居よ。もの真似をして往来で観衆を集め演し物の絵を売ってぼったくる大道芸人よ。まともな役者たちじゃねえよ」

十郎兵衛は集団を非難した。春朗の部屋に上がり込みさきほどから古畳のうえに寝転んでいた。

「役者崩れですか？」

「俺とは別の世界の人間たちよ」

「あなたと同じ本櫓の仲間かと思っていた」

春朗はこのとき初めて十郎兵衛がその集団の仲間ではないことを知った。

「彼らの芸ほど下品で狡猾なものはない。詐欺だよ。彼らの演技は小屋を持たないで野外で演じて金を取る」

「なるほど」

「本櫓の前宣伝よろしく人気役者を演じて見せてその役者絵を売っているのさ。版元から莫大な売り料を掠めてさ」

「こりゃあ驚いた。本櫓の役者を描いた絵をねえ」

「結果、版元が奴らを重宝するはずだよ。何せ奴らの演技たるや観衆の気の引くコツを心得てやがる。それで集まった観衆はついつい人気役者の錦絵を買うってわけさ」

春朗は興味深い話が聞けたと思った。

「版元にとっちゃあ願ったり叶ったりだ。手間賃出しても損はしねえ。そこで奴らはますます図に乗りやがって版元連中に対して手間料を上げていく。まったく賤しい集団だよ」

嘗て春朗は役者絵を描いていた絵師だ。半ば呆然となっていた。

それにしてもその怪しげな集団の持つ観衆に受ける演技とは何か特別なものがあるのだろうか。疑問が湧いていた。
「しかし、惹きつけるわけはどんな技なのでしょうか」
「猿真似よ、猿真似。似せた演技に品を作りゃあそりゃあもう拍手喝采だよ。奴たちの持って生まれた猿真似根性に何の理屈がいるものか」
「たいしたもんだ」
「ちぇっ、何を感心してやがる」
十郎兵衛は吐き捨てるように言うと上を向いて黙った。集団たちに対する軽蔑の念がありありと窺われる。彼には能役者としての誇りがそこに表われているようにみえた。
やがて立ち上がり、「しかし何んだねえ、江戸の歌舞伎も荒事ばかり、これはご時勢なのかねえ」と大きく溜息をつきながら帰り支度を始めた。
軽快な舞の美しさに見惚れていた春朗はこのとき思い出すように尋ねてみた。阿波といえば四国。阿波の能役者となれば上方歌舞伎の領域に入るだろう。十郎兵衛が阿波の能役者の流れを汲むことは小紫から聞いている。
「確か上方歌舞伎は荒事にはあらずと聞いたことがあるが、そうなのか？」
十郎兵衛の目がきっ！と春朗の方に向けられた。
十郎兵衛は一呼吸置くかのようにしてから春朗の前に座りなおしそれから彼の役者魂なるものを見せつけるようにしゃべり始めたのである。
それは同じ歌舞伎を演じるにも見せ場の違いについて訴えていた。
「荒事に対して上方歌舞伎は和事よ。和事の第一の徴は舞よ。身ぶりや語りこそ写実の粋ってわけだよ。それに比べ荒事の粋は勇壮のみを芸の徴としている。つまり今のお江戸にはこの心意気ばかりが受けているってわけよ」
春朗は上方歌舞伎を一度観てみたいと思った。

「なるほど和事ですか」
「そうよ、繊細なふりだよ。単にお決まりの勇ましさばかりを強調したって情緒は伝わらねえ」
「一度観てみたいものだな」
「それが吉報よ、近々に観れるかもしれねえぜ」
十郎兵衛は声を潜めて春朗に顔を近づけて言った。
「こうなっちゃあここだけの話で聞かしてやるが、並木五瓶という上方歌舞伎役者が近々江戸に来る」
「いつ頃だ？」
「それは言えねえ。内々に進めている計画よ。漏れるとやばい」
「ま、楽しみにしときな」
十郎兵衛は歯を見せて微笑むと上がり框に降りた。雪駄を履いて帰り際、更に小声で言った。
「中村座もそろそろ危ない。休業間違いなしだ」
全く別の話を聞かされて春朗は唖然とした。
「じゃあな」
十郎兵衛の姿は消えた。
春朗の脳裏で路地で軽快に舞っていた十郎兵衛の姿が再び謎に包まれて奇妙に舞っていた。

第九回

ここへ引越してきてから半年が経った。嘗ての勝川派一門の看板絵師春朗が姿を消してからそのあと今はどこに住んでいるのか知るものは誰もいなかった。

唐辛子売りに精を出しつつも常に春朗の頭のなかは再び役者絵の世界に復帰する野心に燃えていた。除名の鬱憤もさることながら今は潜伏して自分の画道を極めるしかない。そしてそれは十郎兵衛の言う和事の教理としての容(かたち)や大いに受けるという大道芸人たちの猿真似の意味する容(かたち)が春朗の頭のなかで渦巻くのであった。

暇が出来たある日、再び小紫の居を訪れた。

「商売もあがったりでまた絵なんぞ描き始めようと思うのですが先立つものは金の段取り、どこかいい商売はないものかと」

「おやまあ、贅沢な道楽だこと」

小紫には未だ自分が嘗て名を馳せた役者絵師だったことは述べてはいない。三代目瀬川菊之丞の大磯の虎の絵のことが頭をよぎったがあくまでも身元を明かさない覚悟だ。

小紫は相変わらず芸者風情の色香を漂わせながら茶の間に座っていた。三味の音は聞かれず静かな昼下がりである。

「そんなにお困りなら頼んであげようか？それにしても何を描くんだい」

「ただ絵の修練程度のもんで…。伝があるならお願いします」

「日本橋通りの油町に耕書堂っていう書肆があるのをご存知かい？版元は蔦屋重三郎といって、ちょいと理由あって知り合いの仲なのさ。商いの世界では広く知られているしひとつ口利きでもしてもらえるよう頼んであげようか？」

これは寝耳に水だった。江戸広しといえど狭きが喩えこの姐御と蔦重とが繋がっていようとは思いもしなかった。このことに因り自

分の正体がばれないとは限らない。春朗は一瞬戸惑いを覚えた。
「耕書堂とはまた大口版元。恐れ入るばかりかそちらに迷惑でもかけることになれば申し訳が立ちません。何か簡単な儲け口で結構です」
「嫌なのかい？頼んであげるよ」
蔦重は嘗て歌麿の雲母摺の大首絵を売り出して大いに儲けた。当時、勝川派役者絵師春朗の耳にもこの噂は当然入ってきたし蔦重に対抗すべき版元にとってはいうに及ばず浮世絵界では驚愕の出来事であった。雲母摺は贅沢な錦絵でその抜きん出た商法は他の版元を圧倒したのである。ところがその矢先の例の事件である。お抱え売れっ子戯作者京伝の洒落本が風紀綱領に触れるとして発禁、よって京伝は手鎖五十日の刑、版元の蔦重は財産半減の刑を言渡されたのであった。勿論この報についても広く伝わり知らないものはなかった。
「おかしなひとだねえ。探してるんだろう儲け口」
「うむ。でも耕書堂は結構です」
蔦重が春朗を知らぬわけがない。数ある競争相手のなかでも和泉屋、鶴喜屋などは蔦重にとって最も手ごわい商売敵だった。嘗て和泉屋は勝川派の役者絵を独占し鶴喜屋は歌川豊国を中心とした美人画を出版して蔦重の耕書堂を脅かしていたからである。その勝川派春朗が今や除名にて追放された噂などいち早く出版界の元締めの耳に入らぬはずはない。
「なんだか知らないけどお前さん、ひょっとして蔦屋重三郎を知っているのかい？」
春朗はただ断っただけだったが小紫は凡その見当をつけたのかそれ以上は聞かなかった。しばらく無言で呆れた様子をしていた。

第十回

「それにしてもひどいねえ、発禁となりゃあその版本はことごとく絶版にさせられるだけでなく版木および印本をも没収されたあげく破棄または焼棄とはねえ。さらにそれ以後の売買が禁止されるっていうじゃないか。写本、上書きの類もこれを復刻することも写本のままどこかへ流すことなども一切だめで、これじゃあ作者も版元もまるでこの世から抹殺されるようなもんだよ 」

小紫は恐ろしいほど出版の世界に詳しいことを語り春朗は度肝を抜かれた。単に噂だけでこんなことまで知り得るはずはないと思ったからである。

「今、蔦屋に居候している十返舎一九っていう戯作者がそう話してたよ：まったくひどいご時勢だよ。それに最近じゃあ大御所歌麿にも逃げられて踏んだり蹴ったり。超売れっ子だった京伝も処罰に懲りておとなしくなり身上半分押さえられた蔦屋も今じゃすっかり火の車さ」

「一九って聞いたことがない。何を書いているんですか？」

十返舎一九とは何者だろう。春朗にとって初めて知る耕書堂の食客だ。

「面白い物書き屋でなんでも今、道中記かなんか執筆中だとか。元はといえば生まれは駿河らしいが上方の物書きで東海道を膝栗毛、江戸に上って出版すべき版元を当っていたらしく辿り着いたのが蔦屋ってわけだよ。蔦屋は大いに期待してそのうち落ち着けばやがて出版されるのではないのかしらね」

まだ未完の書きものであれば分からないはずだ。それにしても蔦屋は起死回生の機会を着々と進めていることが春朗の脳裏に伝わってくる。十郎兵衛の上方歌舞伎といい上方の書き屋一九の出現といい上方に対する興味は広がるばかりである。

「それはそうとお前さんに見せたいものがあるんだよ。これも元はと言えば上方の絵描きの連中が描きなぐった絵なんだけどさあ」
思い出したように小紫は立ちあがり「いつだったか雪の降る日に見慣れない会合があってね：お前さんが昔絵を習ってたと言うから見せてやろうと思ってね…」と言いながらゴソゴソと部屋の片隅を探し始めた。やっとそれを見つけたらしく「これだよ」とくしゃくしゃになった絵を春朗の目の前に差し出した。
「侘びだとか寂びだとか雅びだとか盛んに議論し合っててさあ喧々諤々だったわよ…。この絵っていったい何処がそんな風なのかお前さん分るかい？」
春朗は数枚の絵を見て暫く黙る。
「あの夜はちょうど雪が降っていて障子窓から見た雪景色を描いたんだねえ…こんな絵っていい絵なのかい？」
春朗の目はますます食い入るように眺め入った。
「ねえ、どうなのよ」
小紫の声が遠くに聞こえた。春朗の眼前に異様な旺盛心が群がっていた。この画風は誰が広めしものかを知りたい衝撃に駆られた。興奮が口からこぼれて早口で小紫に問う。
「連中の名は何と言っていましたか？」
「何でも俵屋宗達の流れを汲む大和絵師、尾形光琳の一門だとか」
単に墨による一筆の描写が春朗の心を貫いていた。門派の名をしっかりと頭に刻みいつまでもその絵を見つめながら唸りつづけた。
「ねえ、感想はどうなの。何故黙ってるのさ」
確かに黒墨の濃淡に茶道のそれと合い通じるものが見えてきそうな気がする。しかも大和絵の発祥はこれまた上方。春朗にとって上方はすべて新たな容（かたち）であるように思われた。

第十一回

夏盛り。窓に風はなく四隅には半紙の屑が足の踏み場もなく広がっている。一段落して外の空気でも吸ったらいいのだが時間を惜しんで描きつづけていた。この狂気は根っからの執着心の強さからきているのだ。

小紫から聞いた光琳派一門の情報。早速翌日から江戸中歩き回って居所を探し、二日目に運よく突き止めて入門の願いを申し出、思い叶って修練の機会を与えられた。重々懇々にて求道する者、俵屋の門筋を守り浮世絵の類なきよう勤めることの門是の説明を受ける。描くのは主に花鳥風月鳥獣に宿る明瞭にて幽玄及び淡白にて緻密を墨の濃淡にて写実することを第一とすべきことを言渡される。

春朗は翌日より夜昼構わず描きつづけた。この画風を習得し嘗ての恨みを晴らすために必ず舞台に躍り出てやる。秘める思いは常に変わらなかった。

「おっ、描いてるねっ」

聞き慣れた声が飛び込んできて狭い背後に立ち塞がった。十郎兵衛だ。

「暑いのによ、毎日精が出るもんだな」

春朗は返事もせず一心に筆をとる。もろ肌を脱ぎその背中に汗が滲んでいた。

「それによくもまあ同じものばかりを描いてやがるな」

十郎兵衛は春朗の目の前にある鉢植えの草花を眺めながら呆れたようにつぶやいた。しばらくむさ苦しそうに顔を手で扇ぎながら春朗の絵を覗き込んでいたがやがて声を潜めて告げた。

「聞け、愈々並木五瓶なる者が江戸にやってくる。上方歌舞伎が上演されるぞ。おれは早々に中村座を離れて準備で忙しくなる」

予感は的中した。春朗は彼が入ってきたときから十郎兵衛の異様

な息づかいを読み取っていたのだ。
「とうとう参上か。楽しみだなあ…それにしても何故中村座を去るのですか？」
「だから準備のためよ」
しかし春朗は不思議に思った。何か彼の言葉の裏に隠されたものがあるようでならない。大方、中村座での興行が易(やさ)しくないからなのだろうか。「洩れるとやばい」と言った彼の言葉を思い出す。しかし十郎兵衛は詳細を語らなかった。
「中村座を離れて他の場所でその準備に就くっていうわけですか？」
「そのとおり。中村座は間もなく潰れるだろう。並木五瓶率いる一座の受け入れは控櫓の都座に決まっている。そこで…」
十郎兵衛は居ずまいをただすようにしてから更に声を落とし「実は頼みがある」と本題を切り出した。
「絵を描いてくれ。役者の似顔絵だ。興行に先だって広めたる宣伝用だ」
「似顔絵？」
「そうさ、看板絵でなくていい。こんな半紙にて十分だ」
十郎兵衛は春朗が手にしている半紙を指した。春朗は草花の写実をつづけながら内心謎に包まれているような十郎兵衛の企てを不気味に感じずにはおれなかった。
「頼むよ」
「しかし、どうやって似顔絵を描けば」
春朗にとって具体的な疑問が湧いた。
「心配に及ばぬ、すべて段取りはこちらでやる。ただおぬしには絵筆の腕のみを用立てて欲しいのさ」
十郎兵衛のいう段取りとは「中見(なかみ)」を指していた。興行の幕開けまでのあいだ小屋に篭って稽古を演じる役者のそのままの姿を描き写して欲しいと言った。しかも十郎兵衛の望んでいる宣伝絵とは単なる贔屓絵ではなく個性の溢れた似顔を強調していた。
「幕開けはいつだ？」

「分からん」
十郎兵衛は今は確信がつかめないとでも言いたげに顔を曇らせたがその表情は決して空言とは思えない熱さが宿っていた。新しい画風を今学んでいる春朗にとって再び役者絵の誘惑とは何の因果だろうか。渦巻く迷いがしばらく絵筆を停めていた。
春朗は暑いことに気付き半紙で顔を扇いだ。散らかした紙のなかを歩きながら、「分からん興行のためにその宣伝絵を描けというのですか？」と言うと慌てた十郎兵衛はすかさず手を振り「必ず、必ず」と言い直した。
十郎兵衛は再度念を押して宣伝絵のことを頼むと急いで居をあとにしていった。そのときの目は路地の片隅でトントントンと走って舞い、振り返りざまに見せたあの鋭い光を帯びていた。

第十二回

秋風が吹いて景気とりたてて変らず。懸念されていた中村座の噂も別段立つことなく過ぎていた。しかし予告どおり並木五瓶一座が江戸に到着すると十郎兵衛は中村座を離れ同時にこの長屋からも姿を消した。上方歌舞伎の師走初めの興行の噂がどこからか流れ、果して春朗のもとへ今は閉じる都座の芝居小屋から十郎兵衛の報せが届いた。春朗の日常は変わり約束どおり宣伝絵を描くため隠密の行動が始まった。

公認歌舞伎小屋としての控櫓都座は今は本櫓中村座が興行を行なっているあいだは開かない。しかし使用許可は一体誰が取ったものなのか、増して上方歌舞伎が上演される手筈についてもまさかお上が設営したものとも思われない。春朗は空の都座の桟敷席の中央に立ち絵筆を動かしながら稽古役者の顔を見守った。十郎兵衛の熱い期待が半紙の上に広がっていた。描くのは似顔画、贔屓画にあらずと言った彼の言葉が思い出されてくる。春朗は目を凝らして役者の特徴を写し取りながら凄まじい勢いで次々と描きまくった。足元は次第に描き損じて捨てられた半紙で埋まっていった。

嘗て「中見（なかみ）」というこの画法は自分が勝川派に籍を置いていたころを顧みても一度もなかった。役者絵の世界においても大方は「見立（みたて）」という画法に拠っていたからである。「見立（みたて）」は画風が一様でただ形式のみを基調としていた。そこにおいては役者の仕草や表情に特段の個性はなく錦絵として売り出す版元の色刷りの出来栄えだけにその個性の違いが存在していたのである。

傍で見守る十郎兵衛は満足げに春朗の絵を眺めながら演（だ）し物（もの）の筋書きや興行の意気込みを語りつづけていた。そして彼は「役者の似顔に端麗さはいらねえ、真に迫る表情を描いてくれ」と何度も言った。

通うこと数日。互いの経歴を詳しく知らず怪しくも結びついたこの因縁に春朗は不可思議を覚えつつも空の桟敷席の中央に立って何百枚もの似顔絵を描きつづけた。そしてようやく主要な役者の似絵を完成させた。

界隈の木々が色づき始めた頃、完成した似顔絵を受け取った十郎兵衛は礼を述べながら「例の話だがお上の手が入った」と意味ありげに伝えた。春朗が訝しがると中村座に折からの調べ役人数名が過日舞台に踏み込み突然公演の中止を申し渡したというのである。演じていた演し物(だもの)が仇討ちの筋書きでそれは体制批判の風刺が込められ余りにも不都合なりと判断した理由によるものらしかった。「中村座は潰れるのですか？」と春朗が問えば「時間の問題よ」と嘲るように微笑した。春朗はこの筋書きが十郎兵衛には既に以前より予知していたかのように思えた。彼の企てなのか。いずれにしても彼の洞察力には驚きを隠せなかった。やはり中村座とのあいだで何かあることは否めない。しかし春朗は敢えてそのことについては聞かなかった。

「本櫓はこれにて全滅休業だ。やがて控櫓としてこの都座をはじめ他に河原崎座、桐座の幕開きは余儀なくされるさ。年改まれば三座揃っての正月興行の幕開けは間違いなしだ」

十郎兵衛は春朗の役者似絵を再び取り出して握りしめながら、「これを試みに先ずは一足先に上方歌舞伎の興行だよ」

と満足げにつぶやいた。

これが春朗が見た十郎兵衛の最後の姿だった。

第十三回

約束を果たした春朗の日常が元に戻った。再び光琳派画風に精を出して毎日を送っていた。唐辛子売りも再開しささやかな糧ではあったがこれにより半紙と画材の草花を買い求めひたすら写実の修練を積み重ねた。

「大変なことになったよ、中村座が休業さ。とんだ世の中になったもんだよまったく。何だか知らないけどさその代わりに控櫓の都座で師走初めには上方歌舞伎の興行があるっていう噂じゃないか。お前さん聞いてないかい？」

晩秋の暮れどき、久しぶりに小紫が顔を見せた。春朗は狭い部屋に茶を出してもてなす。彼女は早速口角泡飛ばさんばかりに語り始めた。

「その都座の興行だけどさあ、幻のチラシ宣伝が出まくっていてそれがまたえらい評判でまだひと月もあるっていうのにわくわく期待してるっていうよ」

「何ですか？その幻のチラシ宣伝っていうのは」

春朗は茶湯を口に運びながらわざと知らぬふりをして尋ね、一方ではその似顔絵がばれないように証拠の半紙が部屋の片隅に残っていないかを配慮した。

「絵なんだよ、演じる役者の似顔絵さ。これがまた興に入る個性が滲み出ている趣きがあって嘗てない描写だとか」

「見たのですか？」

「噂なんだよ。そいでこの間も一九先生が言うには稀に見る筆致、誰が描いたものか相当な腕の持ち主、所在を知りたいと。恐らくこの話は先生の語り口からみても蔦重の食指を大いに動かしたみたいだよ。何だかこのあいだの逆だけどさあ、お前さん心当たりはないかい？」

部屋のなかに忍び寄る晩秋の冷気がふたりの茶を啜る音を深く包み込んでいた。
「蔦屋のような大版元がその絵に何故に閃きを感じたのでしょう。か。たかが控櫓の前宣伝、捨てられるのが落ちのチラシ摺りじゃありませんか」
「知らないわよそんなこと。しかし蔦重の眼にはそうは写らなかったらしいよ。今は前にも言った通り商いは瀕死寸前の有様さ、わりと霊感が働くのではないのかい」
「その都座に聞いてみれば分かることではないのですか？」
「それが一九先生の話だと都座は未だ閑散として人気がない状態だっていうじゃないの。興行予定の上方歌舞伎の役者すらどこにも見当たらないと」
春朗は思わず息を呑んだ。自分が連日「中見（なかみ）」画法によって写し取るため通った都座が閉じている。並木五瓶率いる上方役者の一行が消えた。この言葉は一瞬にしてあの稽古風景を幻と化した。それにしても十郎兵衛はどこに消えたのか。さらに謎めくこの一連の出来事もやはり彼の仕業なのだろうか。まさか秋口だけ催された虚偽の振舞いとは到底思われない。きっと訳あっての一時隠遁なのだろう。しかし予定通りの宣伝は既に行なわれていて幕開けまでにはまだあとひと月の猶予があればとりたてて不思議なことではないのかもしれない。
小紫の帰ったあとその夜遅くまで春朗は眠れなかった。狐につまされたようなこの出来事は単なる絵空事とは思えなかった。

第十四回

とおがらしー。とおがらしー。春朗の声が日本橋通り油町に流れる。今日は商売の格好はしているが懐に証拠の宣伝チラシを忍ばせていた。実は一週間前、何処で居所を突き止めたのか突然蔦重の使いの番頭が長屋に現われ版元直々の商談があることを告げにきたのである。都合の好い日を選んで一度お越し願いたいとのことだった。

まさか蔦重にとって嘗ての勝川春朗が昨年末から八丁堀に住み唐辛子売りをしているとは思いもつかないだろう。小紫から聞いたように例の絵に相当関心を持っているとすれば、ここはひとつしらを切って何かしらの取引が出来るかもしれないと思っていた。

部屋に通されてから暫く待つとやがて蔦屋重三郎が現われた。やつれた感じには見えたがさすが鋭く先を読む眼力がその言葉尻に滲んでいた。

「錦絵に画風の刷新を図るためその絵師を求めている。この絵を拝見すると過去の型を打ち破る趣きが感じられ役者似顔の類型を変える先駆となるような予兆がある。そこでその才能を他の版元に先駆けて当方で支援したいのだがおぬしの心積もりのほうをお聞かせ願いたい」

蔦重は静かに語った。彼のその絵に賭けている意欲が真に伝わってきて春朗の心は再起の機会が訪れていることを悟った。小紫の言っていたことは偽りではなかった。忽ち春朗は蔦重の目を見てすかさず答えた。

「我が身は嘗ては浮世絵界に名を連ねた門下の端くれ、訳あって今は除名の身となっています。その経緯だけをご寛容していただければ願ってもないご高配、喜んでお受けします」

春朗が頭を下げたとき蔦重は黙ってうなずいた。

その日、秘かに密約がとり交わされたことは耕書堂の人間は誰ひ

とりとして知らなかった。
天秤棒を担いで耕書堂をあとにするとき春朗の胸中は躍っていた。長屋に転居してからやがて一年がたち師匠春章の一回忌も近づいている。再び浮世絵界に復帰する機会が目の前に訪れるのだ。
油屋筋を過ぎ絵草子問屋街を通ったとき今尚消えずに残る屈辱が思い出されいよいよ兄弟子春好への復讐が成就する日が迫ってきたことを意識する。
と、しばらく行ったとき何処からともなく看板筋の道中に響く足音を聞いたような気がした。その音はトントントンと進み行く忍び足の音のように聞こえた。気のせいかとしばらく耳をそばだてた途端それは宙に舞ったのである。俄かに十郎兵衛の幻視が広がり妄想が師走の夜空に映えた。
果して幻の興行は行なわれたのだろうか。春朗の弾む心の一方でそれは怪奇に揺れつづけた。

第十五回

噂通り中村座休業後、本櫓に替わって都座、桐座、河原崎座の控櫓三座が正月に向けて幕開けの運びとなった。早くも正月興行の各座は演(だ)し物(もの)を決め版元の大所へそれぞれ目当てにしている浮世絵絵師の確保に余念がなく奔走を開始した。荒神明前の鶴屋は歌川豊国を既に押さえ、蔦重と同じ日本橋通りにある和泉屋は勝川派総帥春英を早くから口説き落としていた。耕書堂に居候する十辺舎一九も立ち直りを賭けた蔦重のこの度の奇策が不安でならない。

「版元、大丈夫でっか？甘泉堂鶴屋は豊国だっせ、それに其処の仙鶴堂和泉屋は勝川派の総帥はん。なんぼ画風の革新を担う新鋭旗手言うたかて勝目がおまへんがな」

一九の相変わらずの毒舌ぶり。生まれは遠州・駿河だが大坂で七年ほど暮らしたせいで関西訛りでまくしたてる。自分も最初は稀に見る画風と目に付いたものの何処の誰だか名の知れぬ絵描きとあれば常に競い合った大手版元仲間に披露するには余りにも貧弱すぎやしないか。心もとないとばかり忠言した。蔦重は黙って折り合わず、厳しい表情のみを浮かべていた。超人気を博した京伝が罰せられ、あてにしていた歌麿の寝返りとつづいては今度の極秘策が失敗となったときは貧窮の底を舐めなければならない。もはや再起もままならない状態に陥るのだ。そんな時機に強いて閃いた確信とはいったい何に因っているのか。一九は時々番頭にその経緯を尋ねるのだが詳細は分らなかった。

「従来の役者絵は見立(みたて)にて描かれた。役柄や内容を心得ていたからこそあとは描かれた役者の風貌の巧拙のみが評価されたのだ。だから芝居の臨場感は疎放であって役者の表情や手振りを其処に表わすことはなかった」と蔦重の答は終始変わらなかった。

「ほんなら今回は中見(なかみ)でいくつもりでっか？しかしどこまで其の効

果がありまんのやろなあ。やっぱし錦絵は見栄えと違いまっか？それと売れた絵師の名前でないと皆買いまへんで」

しつこく一九は食い下がり、最後には知名度こそが要であることを主張した。江戸に疎い一九に対して江戸浮世絵界の隅々までその絵師の名を知らぬ蔦重ではなかった。その正体を口には出さなかったが大方の見当は既に胸のうちに抱いていた。それは去年末、勝川派大御所春章逝去のあとの動静について版元の耳に入らぬはずはなくこの宣伝絵に出遭わなければきっと忘れていたことだろう。紛れもなくこの宣伝チラシの描き手は名高き勝川派一門で今は行方不明となっている春朗であると睨んだのである。

「興行まで日もおまへん。鳥居派は例によってもう一挙に看板絵の段取りに着手してるっていう話ですし、錦絵にしたって従来の方式の見立（みたて）を執ればもう段取りはつきますがな。ところが幕開かなければ取りかかれない中見（なかみ）、これじゃあ最初から出遅れでんがな。興行中、方やどんどん売れるわ宣伝にもなるわでは座元や役者たちもそりゃあ皆鶴屋や和泉屋を歓迎しますがな。しかしほんまに中見（なかみ）という手段で今回勝負しなはるつもりでっか？」

ひと昔ほど今は活気のなくなった耕書堂の片隅で食客である一九の甲高い声が響き渡っていた。

第十六回

暮れが押し詰まって三座の幕開けが間近かに迫りし頃、蔦重から春朗のところへ二度目の呼び出しがあった。店では密談が出来ないので二人は日本橋裏角筋の隠れ居酒屋へ出向きそこで差し向かった。最初に重要なことと前置きをして蔦重が問うた一言がいきなり春朗の懸念していた的を射った。

「前回の除名の話を聞いてやっと分った。最初から只事ならぬ腕とお見受けしてはいたが、勝川春朗とはおぬしのことであろう。兼ねがね噂は私も知っている。まだ歳が若いのでこれからが舞台だ。先だっても決めた通り間もなく幕が開く控櫓の興行を新しい画風を持って登場させたい」

見抜かれたという衝撃よりも隠していたという自分の傲慢さを反省させられた。静かに語る蔦重の口調は相変わらず画期的な野心に満ちていてそれが春朗の心に伝わっていた。春朗はその怪しき縁を噛み締めながら歓喜を押さえつつ迫りくる復帰の足がかりを確実に読み取っていた。

「ところで雅号の件だが名高き各派に従属するのも過去の経緯を暴かれると難儀、何かいい智慧があるか」

春朗には春より光琳派画道を学んでいたので既に密かに望んでいた雅号があった。しかし俵屋の門筋のことがあるのでこれを使用することは出来ない。浮世絵の類を描くことは門是に背くことになり下手すれば三度目の追放の憂き目に遭うことにもなり兼ねない。

「雅号の件はお任せ致します。ただくれぐれもその名の正体については永久に極秘にてまた居所も同様、外には一切の漏れのないようにお願いします」

「ははは、この蔦屋は過去の処罰で地獄を経験した身だ。将来永劫の財産となる版刻確保に念じても必ず守秘しよう」

蔦重は貫禄の微笑を添えながら答え、冷え切った酒を一気に呑み乾した。春朗は上戸であったので勧められても恐縮しつづけるのみであった。

「雅号は後々考えることにして、とりわけこれからの段取りだが、三座のなかで特にお気に入りはないか」

蔦重の問いに連日通った都座の桟敷席が浮かんだ。「中見（なかみ）」画法を身につけた場所だ。幻の上方歌舞伎の稽古舞台が浮かんでくる。すかさず春朗の口から低い声が衝いて出た。

「都座から描きたい」

「良かろう。宣伝チラシを描いた場所、慣れてもいようし勝手が第一」

そう言いながら蔦重は懐から資料を取り出し「それに、なんと都座は…」と都座の正月公演の演し物（だしもの）を調べ始めた。

「二代目坂東三津五郎の花菖蒲文禄曽我だ。これは申し分なき演目、画期的な画風の初陣を飾るのに相応（ふさわ）しい」

と満足げにうなずいた。そして、

「ちきしょう見てろよ仙鶴堂の鶴喜の奴、これまでの役者絵の権化が目をむいて驚くような錦絵を出してやるぞ」

搾り出すように言った言葉に蔦重の再起に賭ける商魂の焔が燃えあがっていた。

春朗はこのとき仙鶴堂が既に春朗の嘗ての古巣である勝川派の総帥に幕開け画を依頼していることなど知る由もなかった。

蔦重がひとりで微酔し春朗は黙々と食していた隠れ居酒屋に本櫓のすべてが消えた寛政五年の終わりがやがて訪れようとしていた。

第十六回（後書き）

次回はいよいよ最終回です。

最終回

四谷の街道筋の広場で人だかりが連日消えず、大道芸人が演じる控櫓の演目に拍手喝采で騒いでいた。蔦屋の錦絵は飛ぶように売れ、やんややんやの大盛況を博していた。その猿芝居が受けたのは描かれた役者似顔を真似ていたのである。

春未だ浅き頃、ちょうど十郎兵衛はそこを急ぎ足にて通りかかるところだった。

あれから十郎兵衛は結局、上方から呼び寄せた並木五瓶一座の師走公演が直前で横槍が入ったためいったん中止せざるを得なくなったのだがその後中村座を休業に至らしめたのは十郎兵衛の密告によるものだという者が出てきて逆に彼は追われる身となり転々と居を変えて隠遁していたのであった。

余りにも観衆の笑い声が大きいので立ち止まった。「ちぇっ、版元に集る乞食集団が」と言いつつも押され揉まれつしながらなかへ割って入りその芝居を見物することにした。

「さあさ寄ってらっしゃい、見てらっしゃい、二代目坂東三津五郎が石井源蔵役で演じたる時代狂言は花菖蒲文禄曽我、今や父と兄の敵を討たんとすっ」

「右手で刀を抜こうとせん、待てい、源五右衛門っ、ここで遇ったが二十八年目、父と兄の敵、し、しんみょうに覚悟しろっ」

源蔵役のおどけたへっぴり腰に笑いが湧く。月代が乱れ瞳の焦点がおぼつかないその表情にまたどっと湧く。

「はいはい、敵討たんとす二代目坂東三津五郎の必死の形相がここにあるよ」

三味線をかき鳴らし太鼓を響かせて甲高い奴らの売り込みの声が乱れ飛ぶ。

「こりゃあすげえや、よく似てるよ」

「これじゃああんまりだよお、猫背の二代目じゃあ台無しだ」

「これまで見たことのねえ画風だなあ」
と口々に絵を手にしたざわめきが十郎兵衛の耳に入り、つられた十郎兵衛はその絵を盗み見した。咄嗟にその絵に何か感じるものが十郎兵衛の瞼を貫いた。どこかで見覚えのある絵だ。すぐに絵の下方に刻された絵師の名を注意深く追ってみると「東洲斎写楽」と読めた。
やがて人並みに押されて街道筋に戻る。十郎兵衛の脳裏には未だに思い出せないでいる絵の印象だけが沈殿していた。
しかし、「写楽」とはこれまで聞いたことのない絵師の名だ。

薫る風にどこか活気を取り戻した賑わいが漂っていた。小紫は久しぶりに日本橋通り油町へ赴き蔦重の店の前に立っていた。
「ちょいと主人はおいでかい？」
番頭が愛想よく飛び出してきて、どちら様でと聞いたが小紫は昔世話になった八丁堀の者でとしか答えず詳細を語らずにいると
「版元は只今生憎留守にしていて」
と頭を下げる。
「何かご用でも」
と訝る番頭の視線を避けて店先に並ぶ錦絵の棚に目をやり、さしあたって用はないのですがとつぶやきながら、
「よく売れるそうで。嘗ての繁盛を取り戻したみたいだねえ」
と付け加えれば番頭は、
「お蔭様でうれしい悲鳴です。もっともその絵は役者の方々には余りにも真に迫っているとのことでかえって評判がよろしくないようで」
と手を揉みながら答えた。
「東洲斎写楽っていうのかい？」
小紫は手にした絵の雅号を見つめながら再起に成功した蔦重の復帰を喜ばしく思いながらしばらくそこに佇んだ。
「たしか八丁堀辺りに住んでらっしゃる絵師だとか」

番頭の声がなだらかに流れ、そうとだけ答えた小紫の耳にその居所の偶然に気づかなかったのか彼女はいつまでもその絵を眺めていた。

実はそのとき春朗の居は既に長屋になく浅草第六天神の脇丁に転居していってからひと月が過ぎていたのだ。

その後、春朗は相変わらず転居を繰り返し「写楽」の雅号もたった十ヶ月で消滅させて新たに俵屋宗理と名乗って絵を描き続けた。

一方、蔦重は三年後の寛政九年に亡くなったが彼は生涯、写楽が誰であったかを語らなかったため版元界のあいだでは東洲斎写楽の存在は永久に謎に包まれたのであった。

最終回（後書き）

ご愛読ありがとうございました。
この作品は十年前に書かせていただきました。
これからも「歴史の謎」を追ってフィクションを書いて行こうと思っています。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3264z/

写楽浮上せず

2011年12月24日09時17分発行